

## <トピック> 9 古墳時代と弥生時代の線引きはどこに？ 県内の遺跡巡りシンポで議論

公開シンポジウム「考古学が解明する邪馬台国の時代」9月8日、東京・[明治大学](#)で開かれた。邪馬台国の有力候補地である[奈良県](#)内からも研究者が参加。「[弥生時代](#)と[古墳時代](#)の線はどこに引けるか」をめぐり、奈良の古墳や遺跡が議論の中心になった。

シンポジウムは考古学の学会としては国内最大の[日本考古学協会](#)が主催。「邪馬台国」といえば所在地が議論の中心になりがちだが、シンポの冒頭、会長の石川日出志・[明治大学](#)教授は「今日は所在地の論争はしない」と宣言。パネリストも多くが「畿内説」を前提に議論を展開した。

史書「[魏志倭人伝](#)」は、女王[卑弥呼](#)が倭国（今の日本）の王に共立され、中国の魏王朝から「親魏倭王」の金印を与えられたと記す。多くの[考古学者](#)は、この過程で「ヤマト王権」が成立し、弥生時代から古墳時代に移行したと考えている。

その転換点を示す遺跡はどこか。福永伸哉・[大阪大学](#)教授は、奈良県[桜井市](#)の[箸墓古墳](#)を挙げた。全長280メートルの、最古の巨大[前方後円墳](#)だ。

箸墓古墳の築造後、各地に同様の前方後円墳が出現する。「各地の勢力に『共立』された王だった卑弥呼が、魏に地位を認められ、他とは隔絶した存在になった。その卑弥呼が隔絶した規模の箸墓古墳に葬られたことで、古墳時代が始まった」と述べた。

これに対し、桜井市纏向学研究センターの寺沢薫所長は、「卑弥呼が共立され、倭国の新たな王都として[纏向遺跡](#)が出現したことこそが、ヤマト王権の成立を示す」として、同市の纏向遺跡の重要性を指摘した。

纏向遺跡では大規模な居館などの建物が整然と並び、全国各地の土器や、海外からもたらされた珍しい植物も出土している。ただし寺沢さんは、新たな王権の母体となったのは地元の「邪馬台国=ヤマト国」ではなく、[北部九州](#)の「イト国」を中心に中国とも外交を展開してきた「イト倭国」だったと主張した。

奈良県立[橿原考古学研究所](#)の岡林孝作・学術アドバイザーも、県内の古墳を数多く[発掘調査](#)してきた立場から、福永さんの見方に疑問を投げかけた。

纏向遺跡の周辺にはホケノ山古墳など、箸墓古墳より古く、全長90メートル前後の前方後円形の墳墓が複数存在する。寺沢さんが「纏向型前方後円墳」と名付けた墳墓群だ。ホケノ山古墳を調査した岡林さんは「それまでの墳墓に比べて十分に巨大で、銅鏡や武器も副葬されている。箸墓古墳より古いから、これらは古墳ではないと言ってしまっているのか」と指摘し、纏向型前方後円墳の意義を強調した。

かなり専門的な議論だったが、会場とオンラインを合わせて約650人が熱心に視聴。奈良の遺跡や古墳の重要性を、あらためて認識させるシンポジウムだった。

朝日デジタル記事 今井邦彦氏筆より